式綱合

宮内省

藤の首塚の芳野さんの話居のお噂
いろいろつまらぬ思ひ出話を未
だ覚まさぬ花瓶の嗚咽時々頻りに
こぼれもせずして殊更に私の伝藤も
ちらるる伊勢の国桜井駅を再び地川乃
ほとりなる山ゆかしさに物語の一内
を蘭きて十七の乙女に成る高人と有る者

宮内省図書寮

されはや山郭公の聲をきゝて暁に草す
夜々雨夕まて捧に連を勤して花に
うかれ是を実に遊ふ徒に桃中の涼しく
志れ是を滴ひて春八つと覚て三際に
今日を翁へ俳諧を結ひて三都に話を
忘れをおさて葉ありて無に花の情に
東海にも是そ出藤まて見へし中に備へ
實の[illegible]雲ゆ好まれし[illegible]

本末を當歌の葉生かられのこゝろ但に心を
富貴の世を經ては呼開の跡に恥を
老のひ涂八色香乃名を續ていり人目
を媚を取めさらんは和従の山吉八古く
なし如[illegible] 松や木槿の甚さ飯なる紙
盡に一日の深切を[illegible]の花を
咲せ[illegible]子として足を伝りさし舞やと
南園停雲の二風子八三歌仙八[illegible]

なきひとに其徳をとるひ長歌に連要を得

ますくもおもはむもの八事節の正路に任す

かゝれはけにありし昔はいにしへに千載の

恨をのこさんには八あらてけふかるを加へんとかく

いふものなりし

元文庚申孟冬日

文頡菴

三都会歌仙行

春一

ひなの月や牛乃尾麻に這かゝる　不角

濱乃子ともの水日暮る　曲此紫

習ひ得し後凌折乃笛吹外て　虎元

雨にもぬれし仏藻ちまた　涙青

拾ひ出して我身八調子も何為教　絶答

溝布無く室所へまてはとりけれ　翻四

塔頂の梟をたゝかんとて松の梵　紫
松茸をもとめ猿の山狩　有
雪をうゝ新酒に折詰を　青
嫁入の舟しき豆を見合　元
老の年を色紙に吟まゝへ　四
南多阿弥陀腐まつて来る　峯
山雪は先鶴を待てゆみをみ　有
湯に入る合は法華経物　紫

異物さの奇なるものかゝえ　元
ゆびはきたかひよ旅の潛と　青
酒屋よりきたる津の宮をおとる　峯
横手駒をよせたゝくとも　四
戰場の傷よ京とは半閑寺　紫
花卿よ今兵さきかゝ又　青
蓋の中氣と玉百の内詠つけ　青
多梓に四よ初ぬ物哀　元

甲子の時わ雲足高お大黒　四
紬ゆかりをきけら哉　答
都立る其の子たゝく堀兵衛
書ぬう聞堀の哉芥子　策
出ぬ稲の穂ゝ哉も都義　元
若たていしたる計の秋　書
ゆゝ哉も芋の実入りよりも小豆丹
祭礼の面ふくれ　古流直　四

糸瓜の云事よ元禄の山　蕉
茅舎軒ゆ書の八庄目屋　有
百日の江湖ゆきて多弱茶　書
洗濯川の秋ゆきし　元
誘ひ合て笠人家の哉　四
芋の子を　ゆゝ　紀　答

真二　　俳書

夕顔や何の咲き出る裏住居
六月一日　赤坂青丸　朝四
生きもかへしぬ蛍なきあり　廣元
稽古とて　朝の風　ふる
ひとり出る蓮の葉の上橋の上　曲紫
寺の掃ひも出る二階掃く　逸笙

さし櫛のぬけてくれる花ぞ三日の月　四

神垣のあのこゝろ見ぬ時雨ひやう　青

秋ぞ来ぬ松の位小屋を焼て　弓

起しゝ来る程は出る家　元

まとゐの月ぞ八月の星の宮　笠

首巻まなみ見るぬお袋　鶯

かしこまる勝ゝかしこ霜酒　青

参かしこあるこの奢のきろく　四

戸を切いくあれ秋の笛ぞ　元

子ぞ遊ぶ遊ぶ遊ぶ八重　弓

猶さけ家嫁の却ても何きゝ　鶯

蕪も機を織るむしの沖　笠

公物ぞ書を除き板書あけ　四

時きとおちの事ない新　青

猶憂の大ゝ清明一の国を　弓

こゝ新とちこそんゝ書　元

お倉嶽の山ふ倉仏の扇会　答

大工仲右ヨリ来状拝見申候　策

紅水の堤ヨリ禅を盗ラレ　書

光ラ国侍　九月のうち　四

生ハンヲ彩ひも与右衛門　元

時雨ヨリ堤ヲ婦をかたラと　有

聞きても嘸さぞ又ラ侍ハ　策

貴ヨリ高田ヲ菊のかゝれ京　答

霜草ヨリ市の中渡ル年中　四

書状を名詩の半ヨリ芸の細ル　書

長ノ子ヨリ紅ヲ姫の相あれ　有

十八日夜　種子　彩おき　元

雪形の如ル末ル都ヨリ嬉しみ　答

苗代時ヲ姫ラ山ヲ　策

寄三

[illegible]の蒼北[illegible]おく

慈筌

月明[illegible]小清水の[illegible]　廣元

[illegible]竿を[illegible]を[illegible]て　堀青

[illegible]の[illegible]の[illegible]　曲紫

洗濯の竿は[illegible]の御[illegible]　[illegible]四

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

遠ヶ忌より出でゝ未知ぬ旅路
元
かゝるを奥をたゞゝ産人
笠
何ぞ奥の外ての蝶の姿ひ
雲
所の節供の夢寄を市
青
寄辺の坂を湯風呂ヶ丸折
有
若衣の毎ヶ針の世話と
四
繁ち振り清みゝうゝ
元
坂ぬ清ぬる市村
青

弥紀の寄ゝ
青
弾数袋ゝ清ゝ老の新魚
葉
春ぬ山の多世清ぬ花の時
四
葉つゝの夏揚ゝ蔵
有
独活ゝ摘ゝ鉢ぬ昭の先
元
元 蕨ぬ頃花つれの日数
笠
三毒時ゝぬ虜嬉中ゝいさゝひ
雲
卯の花ゝわなんの嬉ゝ
青

茂ひて水浅の取流しも宜　宮
若ひ手まんお留守油断　四
鐘落も置いてまぶ乳の年の暮　笙
元朝は宇佐の禰宜にて西東　元
捨てゝ行く上手仲人も減かりけり　青
神祇塊手橋乃見遠め　紫
青中の春は川をの跡かな　四
庭面咲てさざ波出るかな　青

隠し遊尾花の丸の彰馬當　元
歌寺志ら絹ハ附ぬ不動院　笙
柿の手ハ笑うふんくの暮表える氣　紫
雨手ふれ後日の七月晴　青
本唱の清き坊にいく萩の花　里
風雅の種をつまぬ前附　四

苗字詞

むかし一条院東北院坊城の辺に住の人々年
毎に馬を河原に出して立て言を
よすこと一備の昌山の人々年ごとに
出て馬を花形に立て叶言を祈る
さまを時地に武門の連中聞ておのく
東西の風義を学び蒲門の先輩中に
志を立て誰れ十郎蒲の人々を十郎乃
至蒲を冠し或は古く我の姓をうかゝ新
より我子門の名を称し紀伊の国を
たゝへ八幡情の先後より七名八体の苗字

を尋ねられし師匠の伝授なれば其
白馬の色を以て百首の題の名を作り
二十四條の秘伝を いさこ百姿の伝写
もなかつるぬるかしさる事共のお繕伝さ
うと云ふ伝授を人を驚かしは世添る行卿
のなかひて世間へきまる如く絶えず養な
れ其人きハを年廣元の俳諧の流りをおこれ
を沈黙を尋ねと軽文園の族も如
ようとも如来俳諧の流りをかわるとて
あるは沈黙の二字をもさ為事なんきふの
趣を猫まの門の戸口を踏遠くて自己を何や
由ふのこなるくて他を教こなるの故言と

一説に昌源ハ俳諧の由緒を
ひかれ連歌ひかれなるものの名を捨て
其の流りを起んまはくるの流りハ如何
古くんの如くハ小説浄瑠璃のさまくく
絶ハ川源義の流りを尋ねしく
ひかくく京京の流ハ如くされや先師ら
云名のと説ふふ古一編をそれハ一字の
流りとなる事なくて如何ハ言化の流りを
さ為の如何ハ京の言化ハ可雅語の行
なるを撰ふ歌文の編集ハ二十年の芸社
物ハ席ふかくて行卿ハ師匠
今を為くく俳諧の地を

[illegible]の内和[illegible]建門の
[illegible]一[illegible]
[illegible]代石昌書[illegible]
[illegible]人の書[illegible]
[illegible]曲節地乃[illegible]
[illegible]人石昌[illegible]の二編ハ[illegible]の人[illegible]
[illegible]の書[illegible]
[illegible]

石昌
[illegible]
[illegible]の書
[illegible]
[illegible]ハ十[illegible]

[illegible]の古池[illegible]世[illegible]人の[illegible]建[illegible]の発句
[illegible]の先[illegible]の七[illegible]ハ
一[illegible]一[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]十年[illegible]一[illegible]
[illegible]ハ百世の[illegible]石昌[illegible]
[illegible]

活い
[illegible]ハ時の看種
[illegible]江戸[illegible]
石昌
[illegible]
[illegible]一四の[illegible]

茶の湯白ハ東福元禄年中の頃合歟
宗伝の大石心を和合歟
一字の流りすてゝ今ハ何ゝ
湯白ハ宝保の宗乗の頃合歟
むゝの白湯ハ明和ハ五十年
流りハ古今此新古を論るよい何ゝ
昌の地すてゝ流行の面なるを
さハ宗流りす行ふ
拙ゝんハ実ハ
ゝの餅茶の形やなんも
たゝり何ゝ
尾ゝ兼ゝ面ゝ

一ハ拙ゝや桂殿ゝ
苅豆ゝ乃心のみちひきとなり
落ゝ宗蓮の深切ゝ
形風ゝ信ゝ
茶ハ器の
風ゝ
おのゝ
天地自然の
なんハ
白湯ハ
の湯ゝ
東福ゝ

家より此言を称へつゝ祝ん也馬に花作て
とゝのへて松樹千年の風雅を蕣か槿花一日
の名称をおもしろき事とか

長歌行

唐元坊

宮一日くらしゝ木槿々那

笠着てくおもふ盛月の附ほの　田紫

中判の座の奥に野嫌らく　朝日

そ葉子に花の袂はやらく　菊文

いと綺麗おかしに手庵を廻文度　岑乙

おとなせうく来る一雪に侘天　茶炉

ほのかにいはれて起てひきさる　滴水

非書も立ちい居け細工さき　遊釜

小使の国を姫の子にかへ里　百推

書うち数と中に笹粽　巌書

菊手袖のむかしの猪家佐久木村　栗蝶

観音寒に登りて出仕舞　里可

さてもきゝ物ゝて祇園の年累盛　芳菊
鶯ひゝ茅屋ハ鶏ても　玄卜
お郎宿の紅ハ質を採てかし　蘭支
節供ゝてゝ日ハなん　抛毛
月ゝ来ゝ入れと中稲の穂ハまゝ　不有
出替のゝ人を負ます　稲司
遠ゝ浮世の茅理の寺ゝ　岸翠
ゝゝ吟ゝて俳ゝ生てゝ　三雎

青柳の罠ゝ面毛ゝ　芳久
名ゝ半ゝ郎てゝ　東而
一町の花ゝ人ゝ　梅川
笑ひかゝ山ゝ　寄伍
畑打の口ハまけぬ　梅林
立ゝ郎ゝ稲の祇ゝ　柱平
抄望ゝ来ハ月ゝ　橋星
鬼ゝ撃ゝ人の立ゝ　太本

[illegible]

[illegible]

菩提寺の和尚はいとなつかしき

[illegible]

あけくれの湯ひらしてはまた

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

豫田

[illegible]可

彰小

[illegible]三

和桂

芦帆

肥泉

[illegible]

柳ちらすかぜ山湖もちかき国さ　蘇嶺

唐絵すほしてあ[illegible]　田

湯あがりの[illegible]　炉

[illegible]の[illegible]　推

沖[illegible]の[illegible]　文

[illegible]　水

押[illegible]　笙

[illegible]の[illegible]　乙

拍手打ちて小神を呼ぶ　警

東一山の霧晴れて毋の家眺め　慶

新玉の年愛でたる里の花の和　青

聖寺と菩提山八駒寺　孝

餞の花野の奇詠

百東坊

打寄せて思ひ思ひの草の露　峰青

駒清水の清き

春ふかき毛草や首金の弱つるき　不有

蓬

笠の新月文庫まで拾ひ出てきつ小　岑乙

萩

又汐の年より中ゝ萩の音　茶炉

小芳

うゝ浪かけ岸の小萩の乃わか崎　逸蓉

翁芳

俳諧の軽きゝ川や打ち乱れ　滴水

芭蕉

古今集の重吟や嵯の墨ち雁　茅文

藥師草

多あるかいと山路の茅吟草　里可

鶏頭花

鶏頭の竹ゝ数百筆やとゝ乱酒　東樵

仙翁花

駒ゝ雲原術ゝ竹ゝ仙翁花　百樓

壇特

壇特の美ゝかゝ海ゝ乱ゝ　芳菊

苅萱

かゝる中の秋ゝ夜風の立そゝれ　蘭支

帰去来ゝゝ菜の杖　吉ト

稲妻

稲妻ゝ花ゝゝかゝる秋ちゝ　稲日

番椒

ちんかゝゝゝ貢金の赤やゝかゝ　芋夕

錦菊

故郷のゝゝ遠ゝ菊やゝ月ゝ菊　湖を

尾花

おれ路や尾花ゝ生の尺ゝゝれ　東而

蓼

人ゝ帰ゝ笠ゝゝ人ゝ蓼　岸翠

忍草

海鼠あゝ笠の形ゝ忍草　三桃

龍膽

引きむかふ馬の背やまんまる花　柳川

芙蓉

盃にゆく芙蓉の首途かな　雪伍

桔梗

別れ路や京へ帰るさききやうかな　調可

男郎花

足遠きの野に咲きし男郎し　楊里

女郎花

雲の名にまれ何れしき女郎花　録四

相撲草

せんちからくらべは薄の相撲草　文本

蘭

足遠きの霧に白衣想ひしる佳　桂平

鶉草

まくら絶尾は宿し北路の鶉草　響三

春日

和歌山深き紫苑の笹おいむ　彭山

太子堂

物主書稿年南とそれ太子堂　梅林

小車

山寺の寺の名や小車の門迄　蒸蕨

繰り

蔓を主の姫路瑞和の長力　和桂

芦穂

芦穂年見迄所昔のとそれ　蓋帆

都せきを紀

沈を主の花紫や立れ毛　肥泉

聖菊

見迄の稲や聖菊の先鋒ひ　蔵子

[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

江都文通

[illegible]

月[illegible]の先[illegible]　　[illegible]川　路津

八重[illegible]の夕雲雀　　杉舟

[illegible]

[illegible]

[illegible]　　為今

詩歌発句

夏潮

菖蒲ぬく人の手ぶりや物の姿　右範　菖蒲の連中

何さうぶ年経たゆゑ瓢うゑ　東羽

為朝の名さなの人も甲百合　栗九

ゆゑ彩ふ城を嘯うやまわれ　不番　俳

ゆゑ知ぬ雪さゝやゝ花菖　分斗

雪月て撫ぬ山や人の身　呵考

小田原の手ぶりを菖蒲　友洒

家西ゆゑ知て短し花の花　岩鼎

俳諧や糊のかんゝ糸ゝ哉　古芝

名月や雪ゝを四の花ゝ　有琴　ゆゑ連中

大黒ゝ大鼓彩ゆゑ恵比寿　没可

菜の花の白雪ゝ後の月ゝ　仲志

若鮎や山ゝ清ゝの海焼く　橘泊

俳諧の手ゝや蛙の深ゝ地　和楓

竹なれ手に聞て梅か躍の那　琴風

あらたなる心を花に柳かれ　呂杯

春雨や志ほれ吹きハちる佳節　岐山下連中　童平

奥雨もの上山に雨しきれ北蕉葉　備吉

さむしさの音し絶や梅の風自　子禹

今さけと花の中や冬のむ絶　杉宦

垣根の柳をまかむ蕣切なり　呂調

雨ふ蜂山日や松葉に笠の連　東嘯

鼻の香さむせく鶯の古音に　笠松連中　達文

足臨になつし雪のこうれ摘　標霞

初雪や下京中てハ埃ちしま　楚琉

絵まうけを聞かある風の柳かな　大垣連中　里蕊

藤咲や門ある笠の垣隣　壬力乙　東李

蝉の声や楷に風の首藤時　鳥六

葎やあ虫く国まなり夕顔　素由

古佐の絵を夢しつるを猫の恋　古竹

花若葉哭や扇の骨ふるる　徳五

聖の碑も苔若葉を摘日和　小方遷中　琴左

稽時山もまゝ茶摘ばゝみ分　呂柱

いとゝ楽の井ゆゑの苔清　左流

神殿へ詣ゝ花の徒ゝ　魯仙

嚊はゝ茶摘わく母の掌　知春

新茶の出ゝ鶯の跡の哭　蓼明

稽古原猫ゝ大燈ゝ牡丹　杉彩

誉られて おゝ蔵 極楽　素橋

まゝ先人名のゝ山や神ゝ　紀邦

いさよひやちゝ紀男山　退ゝ

図國混雑

風や年まい梅ゝ　図　名古

嫁ゝ寺の柳ゝ邦　義山　義夕

ゝ年ゝ帝懺　清嶽　白臥

待春の畳ゝ牛ゝ　ゝ里　海宜

遠寺うち陸の花人家此ちか　中津川　篇光

いりをとれば門も西中や色人金仏　岩村　椎巴

誕生の仏のさくや風車　郡上　北魚

すてしの花も返〳〵霜かな　龍ノ口ニ山　接魚

伊勢

不抽子の蕊や花もれ出し　常名　俳山

新鳥や月の白波垣津ゑ　何有

雲ふかし橘よ雲ふかし　帰ノ　十

書き矢も通ふ物や雑の声　八調

椎の実の撞ひ出すや初時雨　一羽

木の葉紙遠ちかく初時雨　寺の林

雲ふかし木下蔭ふ　羽皐

蓮の葉の蓋と初時雨　枝山

初雁や撃ル門田の大ーとけ　宇均

紅葉の風や日ふれて神おろし　姫湖

椿子の花手深ふ時　芳椎

新宮を聖天宮や　川舟　桐長
苔寺の岡も蝶もとまるべし　瑞戸山　急明
清水の雪ふる中の一の花　けい龍
青葉を雲ふる荘の湿驛山　書士
柳うつる水や清くとまるの蛍　四日市　玉之
八丈の磯ふる岩や雲の峰　素石
名月や少年の濱を足遠し　山　素若
星ふる夢と書よいを　一　都樗　津　二日坊

尾張

春ふる夢と書ふるや蝶ゝ一の花　名古屋　以之
星祭り八百屋はもくもくと足せの光　丁牧
波の花ちりてや磯のさゝ貝　竹窓
海鼠や花ふる幕の車乃臨　百拙
仙人を待山松や菊ふる花　菊光
志賀の家乃ふるせさゝ波の庵　京　旭
風の磯ふる雲ゝ　春ねゝ邪　吉野小久保　其有

越前

春雨や八日の雲を書く　敦賀　東吾

破蓮の芭蕉似る弘　琵琶舟

蛍の子を抱く夢や加賀の花　左江

如わらく清水柳や橋田川　柳東

蛙の塔を寸き寄せ神時雨　玉橋

枝村の笠の花さく田植小　唐中　貴枝

春は旬見見や菊ひ咲ける　如的

新しく京心手計の茄子哉　柳教

活くるも命や書田の素かへ　市柱

蛍の笠手去日を命や　福井　六枳

蛍の名は鄙の記よりの月　枳苞

夏も来て去くく水鶏や蛍籠小屋　云敲

敬仏花や京まる帳の寸ひ紐　標意

蒸や蛍の鶏先寸ふ羽織　新泉

連歌まを庵て庵ひ邪秋小　山流

初恋の面影を柳の邪　虚白
末ながら雪の玉ぶすを花菖蒲　岩芝
夕顔の小窓に化粧へ出る七夕　糸巴
撫ひなさんすいの菓乃かんに星　韋吹
繁昌する帯屋風の蔦の葉　高浦
汁の海さしみの濱や恵比須講　三玉亭
蕎の笠はく海山や糸や糸　重浦
雪を待る新乃志ゑ　枇杷の花　我山

新婚を井戸端や雪の富　抹山
出る時の涙はあやめの葉　曲浦
加賀　息仙
紅水の渡来は出る郎花　大管丸
沖を渡る出やゆ清秋の心も　鶴芝
蔦紅葉日ゝ水の紅葉　松仙
雛祭と志ん新んかい　子代
俳花は夢刷毛なす　玉泉
　　手賀山
　　嶺

山吹の多沼にうりてや 帝 蜻 北亮
ちゝ山の雪を何へてや 瓜 鶏 素行
風行て吹ゝ雪新の花源 丈志
縄張の内や出る屋の初さゝら 山敬
若月や双六の国を藤をよ舞ら 女 伽流
卯の花や雪や小鶏の鳴き 五く
雪北雪を解すよ名けて妹蓮 青梨
天法繕ふ ちゝ 仏の色れ 御殿川 帝因

已り対の章きるか新 穂夢 ゆ幅 蕪雪
老僧を年ゝ若ゝ山さゝら 枝鈴

越中

赤のさゝ世ゝ知ゝ 活大根 石訪 方璧
久ゝれの沖まちりてや帆ける 眉泉
山嬢を去けてや花の宿世 亡人 一墨
穂ゆはく雪や巻の多世 帝 風映
待て表ふ新まハ隙ゝて 越の雪 稲炎 龍言

一夜庵に宿を求て菓の庵　巴雄
樵夫踏雪を枝の雪　井浪　林紅
小坂の戸を東やゆく雛の葉　北夏　杜竟
屋を出て見る田畑まるく雪　吉生
燈子を掛まゝ寒し　むの花　冨山　白堆
万物の出蓋屋　麻又
春雪の宮を出て叶ふ　魚住　傳蓋

越後

雪を手に戸を掃出て年の暮　糸魚川　菊乙
雪晴の山吉原の中　佐蓋
三吹の新柳の陰の柳うれ　三人　九輔
坂の屋ちかて枝を柳かな　今町　唐虎
持参の雛の供を帯や嫁入前　柳浦　鶴伝
雪九尺屋根さしの　柳五
新雛の梅まさ寒し　糸魚　竹之
弱竹の小春を聴りの音　帆琴

卯の花は日暮さまでも市女笠　杉先
法隆の名を尊寺の柳かな　鶴之
書苔の中和尚笠を赤らん木　百子　嘆素
杖神は母の孤ル　おくわかな　白日
吟魚を作酒を壺江の浦をみ　素堂
はたらを思竹吟ひて竿の先　東可
立ちかも幕を入東をの雪　黄川
風年障子たしを布みをを　岩子　卜友

菓の花は破れて和蝶か川白　砌之
見の寺へ桃初雪苔結ふ　出雲崎　小潟
士夕中只の星人ちみち川　浮涯
孤離を三子人の時雨かな　仙風
名月や藤棚ける帰鳥　喜山
芋嘗ん寒強松や結戚一　上総　多石
波流を汗ふ唐崎の星さか　僊泉
名月や須子の松ハ濁り酒　野和

風の吹かれて柳の枝 在川
（以後）
因て花又人々の身 吉福
（吉板）
おしまの中を辰巳の霧の中 風蓮
（池部蓮）
月新の吹れて遠山の峯 紫雄
蛙鳴や新き蓮の葉 樹芽
蝶の来るや波の音 菊千
詩を語るうかべて船の舟人 林丘
苔の花ようかべて鱗の蔦の上 楚文

蓮の実拾ひ捨て小石の跡 一雪
蛙鳴て秋の夜千鳥 東雪
雪の跡かいくつ山の孤舟 多嬢
笹の葉よ蛙ひ合ひ星迫ひ
（雲生庵）
一方
赤ちゃんを寄せて花の面 二方
（中ノ条）
花の中小さをかけて二世帯 杜角
（芝居）
古塔の橋ちゝ地 南志
朝や蛙の鳴て鮮の声 蓼雪

ゑさしの国も暑さに桜の花　紀州 壽石
錦着て山も入日や帰る山　黒鳥 志風
杉坂の盆も賑ふや京さかれ　新潟 鷺湖
梢の闇も惜しむや後の月　葉園
袷かゝみれハあはれ紀見捨てり　路柱
蕎麦植にかくし纏や白椿　右兮
掬以えぬ妹背分らし鷺の中　章流
物くれる人さへ寒き仏　山市

月にあきまわや橋に語むの人　新発田 棕仙
山寺や香もおゝくて侘しさく　桐里
以うるを多く床まつ君来る　巴凌
浦風や吹絶す深く(十キ)お降の月　猪赤
草笛の小路や泥に田植牛　竹市
卯の花の垣を来る面の暗ヶ那　路月
入川に汲まれ身のあはれさかな　浮虹
主人も起そ候恵はれ雲雀笛　村上 知来

伊賀

なん神さぶるまの屋敷の屋根の苔　おく川　素逸

牛の尾さ掃きなさるる枯葉かな　警川

枯間より湧やうやうくさくさ　独歩

からくれの国府ようみくるる山　楚璞　松葉屋市

お筆の吹はらふや春の雪　支川

関寺の名残ありけり山桜　久年

小男鹿や彩雲ま峠八寸き　野昌　風葉

吹ふくや白雲ふかく雲留　素石

燈籠の下に咲ふやはすの雪　一花

立て居る蛍をとるとて見ぬ　白之

夕照の春行く濃田の村時雨　蕾子

新藁の赤新はぎて梨の花　湖雨

書き苔の名ゆかしやゆかしや九日菊　十紅

牛も神さ祈祭て拝ぶ御ゆな　牽山

卯の月九日かつらの花の磨　芳雅
岩の戸は葉ゝを繁の風の長閑　坂田　鹿柳
篠見を――くゝる所和川柳　和井
瓦山は雲もくゝ見る所　東川
撞木の音は鐘の時雨ふる　書柳
深かゝる山中入の刷毛ぬる　宗上
畑芝に角ふる廉の蓬　杜苓
お筆は彩の情を御所筆　杉苔　巴角

索武

新の風尾ゝ和歌白　園水
夕暮中絲屋の皆ゝの芳彩　吉花
蓮ぬけ色新彩　宗華
初物ゝ先国ゝ二月　年酔
出雲中綿ゝ土産の紙の面　山呂
いさゝか涙中夫婦の門ゝ　柳天
雲の老ゝ岡ゝ和ゝの夏　寸長

[illegible]入の[illegible]春の中旬の川[illegible]

[illegible]会ふ者の[illegible]藤中西瓜如[illegible]

[illegible]峰[illegible]の[illegible]へ[illegible]山中[illegible]柳[illegible]

和國

畑[illegible]日[illegible]を[illegible]り[illegible]中峰の[illegible]紀淡[illegible]

晩[illegible]の[illegible]中[illegible]雉の[illegible]和舟

稲[illegible]つ[illegible]ふ[illegible]ま[illegible]鶏[illegible]

[illegible]寺の竈中[illegible]月[illegible]

時[illegible]の月中[illegible]のきて[illegible]の[illegible]三楚

[illegible]中[illegible][illegible][illegible]

馬[illegible]河[illegible]清[illegible]川[illegible]青[illegible]

雪[illegible]買[illegible]茅[illegible]加十

醉花の中を和[illegible]筆[illegible]其帛

[illegible]角

[illegible]人

醉ぬ人は春の月 梨の花 村流
思ひ合せし古寺の 夏風
雲上を遠く離れ 西風
掃溝の月も 府内 越考 柳江
塵ひりの富士 業種の名人 梅雨 長門下ノ関
塗り下駄手拭 泉旭 周防岩国
入おそうし塗り竹 冷の月 笑云

出作

葉さくらは義経山 土佐ノ知 如何
節操を踏まうが如き 古渡
初年中郎うし 出雲国 涌梨
物語のかゝる 石曲
已の名手多以 蘭の星 白鳥 讃州丸亀
馬方の喧嘩 山茶花 讃州高松
和の橋かけ 沖おうし 雪哉
生子長中九年 毎月皆つゝ 新蘭

雪の中紅風を吹かせ　柏餅　石列法田　梨雨

蝶ゝ飛ひ初ゝもゝ中寒の雪　梨雨

能登

蛙の声新屋敷の工夫小　七尾　国駅

御小の御ゝ枯れゝ小柳小　晩九

子乙女中頃ゝ出ゝ八月ゝ　和莉

狐火の安ゝ寡ゝ綱代寺　山篠

芙蓉